高砂

今を始乃旅衣〳〵日も行末ぞ
久しき　ワキ詞　抑是ハ九州肥後国
阿蘇の宮乃神主ともなりとハ
我事なり我いまだ都を見ず候
程に此度思ひ立都に上り候
又よき次でなれば播州高砂の
浦をも一見せばやと存候

旅衣末はる／＼の都路を
けふおもひ立浦の波舟路
長閑き春風の幾日きぬらん
跡末もしら雲のはる／＼と
さしも思ひし播磨潟高砂の浦に
着にけり／＼ 急候間
播州高砂の浦に着て候 里人を
相待高砂の松のいはれを尋ばやと
おもひ候
松の春風吹暮て尾上の鐘も
ひゞくなり波は霞の磯
かくれ音こそ塩の満干なれ
誰をかも知る人にせん高砂の
松も昔の友ならで

世ゝ思ひつゝゆゑ思積里くして
木いの浪乳思緒くゝみのこゝろ
さの春乃霜積おなかまゝ
松風をのみ分て心残ども恥
れの世し　詞乃思ひを語りふ
りかさなや　吉原八松よこと
とふ帰風乃落葉夜菜袖ぬへて

上音
本信思ちわをかゝぬよく
とこ見高砂乃くだ木のへ養
まつ浪もとしかわてやの淵こも
よわ作るや本漂下信のおちふ
めく興乃さしる語ちなりへて
猶いは陳まれめいなの松ぞ秋も
早詞
久しきぬ厭の興く　里人を

相待ところに老人夫婦来れり
いかにこれなる老人に尋ぬべき事の
候　シテ詞　こなたの事にて候か
何事にて候ぞ　ワキ詞　高砂の松とは
いづれの木を申候ぞ　シテ　唯今
木陰を清め候こそ高砂の
松にて候へ　ワキ　高砂住の江の松
に相生の名あり当所と
住吉とは国を隔てたるに
なにとて相生の松とは申候ぞ
シテ　仰のごとく古今の序に
高砂住江の松も相生のやうに
おぼえとあり　さりながら此尉は
あの津の国住吉の者　是なる姥こそ

こハ当所の人なれ知る事あらバ申させたまへ
ふしぎや
見れバ老人の夫婦一所にありながら
とをき住の江高砂の
浦山国をへだてゝ住むといふハ
いかなる事やらん
うたての仰せ候ふや山川万里をへだつれども
たがひに通ふ心づかひの
いもせの道ハ遠からず
まづ
あんじても御らんぜよ高砂
住江の松ハ非情の物だにも
相生の名ハあるぞかしましてや
生ある人として年久しくも
住吉より通ひ馴れたる尉と姥ハ

守りし松も諸ともに此年まて
あひおひの夫婦と成ものを
謂を聞ハおもしろや扨ゝ
先にきこえつる相生の松の
物語を所にいひおく謂ハ
なきか
シテ詞 昔の人の申しゝ
是ハめでたき世のためしなり

ツレ 高砂といふハ上代の万葉集の
いにしへの義
シテ詞 住吉と申ハ
今此御代に住給ふ延喜の御事
ツレ 松とハつきぬことの葉の
シテ詞 栄ハ古今あひおなしと
地 御代をあがむるたとへなり
よく〳〵聞けハ有難や

不審春の日の　シテ上　光和らく
西の海の　ワキ　かしこは住の江
シテ　爰は高砂　ワキ　松も色そひ　シテ　春も
ワキ　長閑　上音　四海波静かにて
国も治まる時つ風　枝を
ならさぬ御代なれや　あひに
相生の松こそめでたかりけれ

げにや仰ぎても事も愚かや
かかる代に住める民とて豊かなる
君の恵みぞ有難き
ワキ詞　なほなほ高砂の松のめでたき謂れ
御物語候へ　シテ詞　委しく語り
参らせ候べし　夫草木
心なしとは申せども花実の時を

たのしみは陽春乃徳なれや眺へて
南枝花始てひらく志めれ性
味松ハ限りしきとこしなへに
しも花葉時をや守ればよ清乃附
至りても一千年乃色雲濃中に
始めく又老松の色十りの人至
ともり世のためし八しおたよわ哉

まの文萩よ乃葉草露乃
たゞ心を見めくゝてこゝとなるまて
生とし生ものことよ鴬鳥界
のけまよ流色やせのるに
長継かきとえよ式ゞ精撰凉乃
見あり此哥よも流こゝろあし
草木太湖風香水青まぬ萬鶴の

こもる心ありや或は梅東風は
まで秋乃虫の声露よなくも
皆和哥の徳なくすやかりよ哉
殊松ハ萬木に勝まて十八公ら
よそほひ千秋乃緑を成して
古今の色をみず始皇の御爵に
あづかる程の木なりとて異國

にも本朝にも萬民是を賞翫し
高砂の尾上乃鐘の音すなり
暁かけて霜ハおけども松枝の
葉色ハおなじ深みどりたちよる
かげの朝夕にかけども落葉の
尽きせぬハまことなり松乃
散うせずして色ハ猶正木葛

のちよろなりきよはだとんなき
久しくとぶらひ乃末かはらぬ色
いつまでも末代のためしなる
相生乃松ぞめでたき実なるを
えいの松に栄へぞ東の方に者
歌しも君の代のさかへや
今は何をかつゝむべき是は

高砂住の江の相生の松の
精夫婦と現じ来りたり
ふしぎや扨は名所の松の奇特
をあらはして草木心
なけれども かしこき代とて
土も木も 我大君の国なれば
いつまでも君が代に住吉に

先ずさて お積ゆく 猶中ぞ無きと
夕波荒れて海士の衣だにかわよ
うち寄せて追風に海の面に
沖荒さみ出りけりや
高砂や此浦舟に帆を揚て
月もろともに出汐の波路
淡路の島かげや遠く鳴尾
おきすぎてはや住江に着にけり
くわく見えもひさしき
なやかぬ住吉の相生の松
世経ぬさらぬむれまし見る
志らんや見ほの結びてき
代々の神かくやの殿乃
梢を揺へてりしめ竹へ

りへくゑ うたふ 喜撰楽家

下の きそ 万歳楽 松の 太

上月

さすのひなまちて雲龍りひ

おそ世ふ年よりハ寿福をいふ義

千秋楽ハ民をなでゝ万歳楽にハ命をのぶ

相生の松が枝を 颯々

あらたのし せく